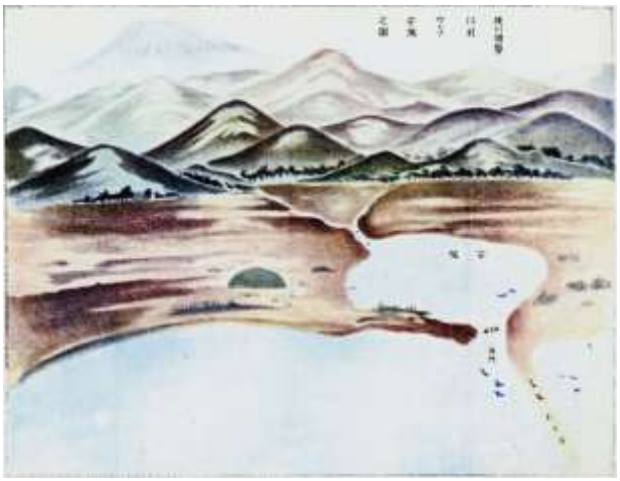
Ｎｏ．２７６【２０１７年９月３０日配信】
「安潟」の伝承（担当：工藤）

こんにちは！　室長の工藤です。

昔むかし、青森の地には「安潟」と呼ばれる周囲が 20km を超えようとする巨大な湖沼があったといいます。この安潟には荒川の流れが注ぎ込んでいたのですが、15 世紀末にこの地に入部した堤弾正左衛門が荒川の流路を変更したために、安潟が縮小・干潟化しその面影は現在の善知鳥沼に残すばかりになったといいます。

この話のうち、堤弾正左衛門のエピソードは 20 世紀初頭に発表された仮説で、ほとんど実証的な検証がなされないまま昭和 30 年頃に通説化したものです。現在は異論も提示されていますが、まだ一般には通説となっているようです。



『目で見る青森の歴史』(1969 年　青森市)に
掲載された「堤川開鑿以前ウトウ安潟之図」

さて、今回は「安潟」そのものに注目してみましょう。安潟は江戸時代の絵図に描かれています。正保元年（1644）に幕府は諸国に絵図の提出を求め、この時弘前藩が提出した絵図（控えの写しが現存しています）中の青森村と沖館村の間に「やすかた」が描かれています。ただ、大きさは東西約 140m、南北 25m で、冒頭に記したような巨大な湖沼ではないようです。これと近い年代に描かれた青森町の絵図のなかにある善知鳥沼は東西約 190m とあります（南北記載なし）。ですから、「やすかた」は善知鳥沼のイメージで描かれたのかもしれません。

また、時代は降りますが、天明 8 年（1788）に菅江真澄が草刈の翁から聞き取ったと思われるエピソードのなかに、安方町の南方にある荒田のなかに木が 2 本生えている小高い場所があり、そこから善知鳥宮の境内林にかけてかつて「大沼」があり、今は善知鳥沼となったとあります。この大沼が安潟と見立てていいでしょう。すなわち、安潟の実像ははっきりと捉えることはできないものの、18 世紀の末に青森の町に住む人々の記憶に、「大沼＝安潟」が深く刻まれていたとみられ、それは少なくとも 17 世紀中頃の絵図提出にまで遡るひとつの伝承であったのではないでしょうか。

では、この伝承の「根」はどこにあるのでしょう。残念ながら、文字や絵図といった資料からうかがい知ることはできません。ただ、考古学からのアプローチによって安潟の尻尾がつかまえられる可能性が出てきたようです。考古学は門外漢なので詳しいことは分りませんが、「安潟」はこの地域における古代の記憶…そんなスケールの大きな話になるのかもしれませんよ。